# 二葉館あれこれ Vol.1

「ご自宅の襖の引手やドアノブの形はどんな形をしていますか？」と問われて、すぐに答えられる人は一体どれほどいるでしょう。身近すぎて気に留めることが少ない二葉館の建具の金物に、今回は焦点を当ててご紹介します。

二葉館の和室にある襖の引手の形を注意して見てみると、全部が同じ形ではないことに気付きます。奇抜な形のものはありませんが、円形や楕円形、菱形や正方形など、襖で仕切られた部屋ごとに引手のデザインは違います。また、洋館のドアノブは卵のような楕円形をしているものが多く、女性の小さな手でもつかみやすいようにデザインされたのではないかと推測できます。

実は、昭和12年に敷地分割され所有者が変わってから建物は大きく増改築され、

り、平成17年に大正創建当時の姿に復元される際、二葉館の洋館部分の建具として戻されたそうです。新しく製作されたものもありますが、再使用できる建具やドアノブなどの建具金物は綺麗に磨かれて現在の二葉館の一部になっています。

引手やドアノブの形に貞奴や桃介がどれだけこだわったかは不明ですが、日本では昔から調度品の中に気に入ったデザインを組み込んで、身近な芸術を楽しんでいました。二葉館にご来館の際は、そんな金物類にも注目してみてはいかがでしょうか。

二葉館を特徴づける洋館部分は一度取り壊されました。しかし洋館で使用されていたドアなどの建具の一部は場所を変えて転用されていたことが古写真から明らかにな

from Archive

# 書庫棟から

文化のみち二葉館2階には書斎の展示があります。作家・城山三郎が「男子の本懐」を執筆していた昭和54年頃に実際に使っていた書斎の一角を復元したものです。その机上は雑然としていますので、見学にご夫婦でお越しの奥様は、「この状態で書いてたの？きれいにしたくなるわね」と、ご主人からは「よくわかるなぁ、仕事をやっているとしょうがない、整理されると分からなくなるから困るんだよね」との感想。「城山家でも、奥様は片付けたくても手を出されなかったそうです」と申し上げると、ご夫婦そろって「やっぱりね」と。

城山さんは一作を書き上げるにあたり、丁寧に詳細な取材を行う作家でした。したがって書籍をはじめ書類や取材メモなど資料も大変多くありました。傍から見れば雑然とした机上も、本人には何がどこにあるのかわかるようになっていたようです。またさらに、書斎のあちこちには本の山ができ上がっていました。それらは本人曰く休火山、そこから本をとり出す時には活火山に変わるというわけです。

展示品の手入れをしながら、机の上や本棚にあるものを一つ一つ見ていると、まるで城山さんがさっきまで坐っていたような、そして「大丈夫、自分で整理するからそのままにしておいて」と声が聞こえてきそうな気がします。

この机で執筆をしている当時の城山さんの写真も展示していますので、併せてご覧ください。本で埋め尽くされた部屋の様子を見ると、書斎の空気をより感じていただけるのではないでしょうか。

# SHIKI 四季おりおり ORIORI

1階展示室2（旧婦人室）では貞奴や桃介が愛用していた着物・帯などを展示しています。これらは貞奴の孫である川上初氏より寄贈されたものです。約30点の寄贈品の中から季節に合わせて年10回ほど展示替えを行っています。今回は夏から秋にかけて行った展示替えをご紹介します。

◀ **羽織と帯**
黒塩瀬の男物の羽織。
背中と袖に福澤家の「抱割紅葉」の紋入り。
帯は貞奴直筆の馬紋様の名古屋帯と桃と紅葉と筏紋様の名古屋帯。

▲ **着物**
楊柳に稲穂と案山子模様で、銀色の部分は刺繍がほどこしてある。
川上家のくずし紋である「龍田紅葉」の三つ紋入り。

▲ **襦袢と帯**
襦袢は貞奴直筆の水の紋様で川上絹布製の麻の生地。
帯は柄違いで貞奴直筆の笹と紅葉紋様の白帯と、現代模様の名古屋帯。

▲ **着物と帯**
着物はちりめん地の小紋。
紋は川上家の家紋である正式な九枚笹。
帯はストライプの紋様の袋帯。

文化のぶらりさんぽみち ①

# 「名古屋市役所本庁舎」

名古屋市役所本庁舎（写真右）
5階正庁（写真中）
四方にらみの鯱（写真下）

名古屋城の通りを隔てた斜向かい、大津通りに正面を向けて名古屋市役所本庁舎と愛知県庁本庁舎が並んでいます。両庁舎共に西洋的な建築様式に和風の屋根を載せた昭和初期建築を代表する「日本趣味を基調とした近世式」の建物で、国の重要文化財に指定されたというニュースは記憶に新しいのではないでしょうか。今回は名古屋市役所本庁舎にスポットを当ててみました。

名古屋市役所本庁舎は昭和3（1928）年に昭和天皇の御大典記念事業として計画され、一般公募の中から地元愛知県出身の平林金吾氏の案が採用され、昭和8（1933）年に竣工されました。当時の市庁舎としては突出した規模を誇る鉄骨鉄筋コンクリート造の建物で、外観を特徴づけている中央にそびえる時計塔の屋根には四方にらみの鯱が載せられ、名古屋城との調和を図ったデザインとなっています。

大正から昭和にかけての日本は慢性的な不況で、本庁舎の建設が始まった昭和6年は名古屋市も財政難でした。不況からの脱出―名古屋は不況下でも近代化、工業化を進展させ、景気は徐々に回復を見せました。この頃に進められた本庁舎の建設は人口100万人になろうとする市民の高まる期待を受けて、昭和8年10月1日に行なわれた竣工記念式典と、3日間に及ぶ「大名古屋祭」は大いに盛り上がったそうです。

さて、「日本趣味を基調とした近世式」の庁舎建築のうち、戦前に建築されて現存するものは極めて希少です。関東大震災以降、鉄骨鉄筋コンクリート造の建物の耐震性、耐火性が高く評価され、4から5階建て以上の高層建築については、構造的にも経済的にも鉄骨鉄筋コンクリートが有利とされるようになりました。しかし戦争の影が徐々に広がり、金融や資材の統制により昭和10年代前半からの庁舎建築は資材調達などで困難に直面しました。名古屋市役所本庁舎は鉄骨鉄筋コンクリート造の技術が確立した後、建築資材が統制されるまでのわずかな期間に建築された、大変幸運な建物と言えます。

独創的で重厚な姿だけでなく建てられた時代を思うとき、本庁舎の違った表情を発見したような気持になります。80歳を超えた本庁舎は、今も現役で頑張っています。